

1957.12.106



溪 稜 NO.6

辻藏書

登山の價値は必ずしも肉体的な剛いや
動くことにのみ存するのではない。價値の
内容は内面的な問題でなければならぬ。
其は登山者の生命がどの位眞剣に登山と内
面的にしつくり一致しているかということ
にのみ存する。

—田部重治「高原」より—

★ 目 次 ★

- ▶ 吾妻山—安達太良山縦走 山野基甲(2)
- ▶ 初冬の仙丈—塙見 ◀
仙塙尾根縦走記 篠崎介二(5)
- ▷ 或る男の述懐 ◀
仙塙尾根縦走の回顧 K·T (9)
- ▶ 県体・両神山登山参加報告 大武昭雄(12)
 - ▷ 両神山麓の記 ◀ 吉田泰彦(16)
 - ▷ 詩一山に思う 山彦 (17)
- ▶ 秋の鳳凰三山 ◀ 近藤澄江(18)
 - ▷ ザクロ石 ◀
—山のこぼれ話— 筒井滿栄(21)
 - ▷ 冬末にりなば ◀ 山彦 (22)
 - ▷ 仲間を語る(その5) —
—筒井女史 ——◀ (23)
- ▶ 初冬の八ヶ岳 ◀ 山縣昌彦(25)
- ▶ 秋の合同ハイキング—棒ノ峯—◀ 吉野富子 (30)
他
- 会務報告 (33)
- 編集後記 (34)
- 表紙 大武昭雄

吾妻山—安達太良山縦走



一切経山より吾妻小富士、淨土平
を望む。

山野基印

底抜けに青い朝
空の下に、東北の
山の駿板谷に降り
立つたのは、人夫

風の男三人と私だけ、早くも一人旅が
始まる。遠く吾妻連峰が朝日に輝き、
麓の紅葉は絶頂と今が盛りである。

がランとして大方のウタを詠め切った
まゝの五色温泉を過ぎ、高倉山の中腹
を行くあたりから次第に籠篋の聲を薄
ぐ跡になる。このコースは積雪期のス

キーの方が楽のようだ。蟹ヶ沢を渡つ
てからは藪は益々ひどくなる。背の没
するヤガの中をかすかな踏跡を見失い
がちになくながらがさ／＼行くうちに
何やら物音を聞いたような気がして
ギョツと立ち止ると、しんとした山
の静寂が無気味な程あたりに満ち、再
び歌い立てるよう歩き出す。

ホツカリと藪から半襟の青木小屋へ
と飛び出す。荒れ果てた小屋には勿論

人気はなく、赤鎧びたトタン板が秋の
日を受けて塗がつてゐる。弁当を少し
食べたが何とも静かすぎる。大声で歌
を唱つてやつたが底抜けの青空に吸ひ
込まれるだけでその後は余計しんとし
てしまう。どうも余り静か過ぎると瞑
想も出来ない。家形山を目指して再び藪
に突進する。

ヤフと家形ヒュッテに着いたが此処
も既に黒人、入口の内側に吊るされた
最高最低寒暖計は最低温度三度を示し
ていた。

家形山より五色沼を半周して一切経
山に登る。こゝまで来ると信夫高湯や
吾妻小屋から来た数ハイティの登山者
に会う。一寸蒸やましいアベック組の
坊を離れて山頂の端に腰を下ろす。吾
妻小富士の円錐形の火口が良く見え、
その手前一切経の中腹からは真白な噴
煙が昇つては青々空に消えていく。
北方には飯豊山らしいが頂を見せ

(期日) 十月十四・十五日(晴)

単独行

静かな晚秋の東北の山々、これは長
らく私の期待していた山旅の一つで
のつた。天気図がこゝ数日の好天を保
云翌日の臨時休日を利用して(つゞけ)に
もう一日かけてし早速サツフを背に出
掛けたのであつた。

ている。東北の山なみの何と柔かいことよ。

一人して向い答へつゝ行く山は
秋深まいて徑かすかなり

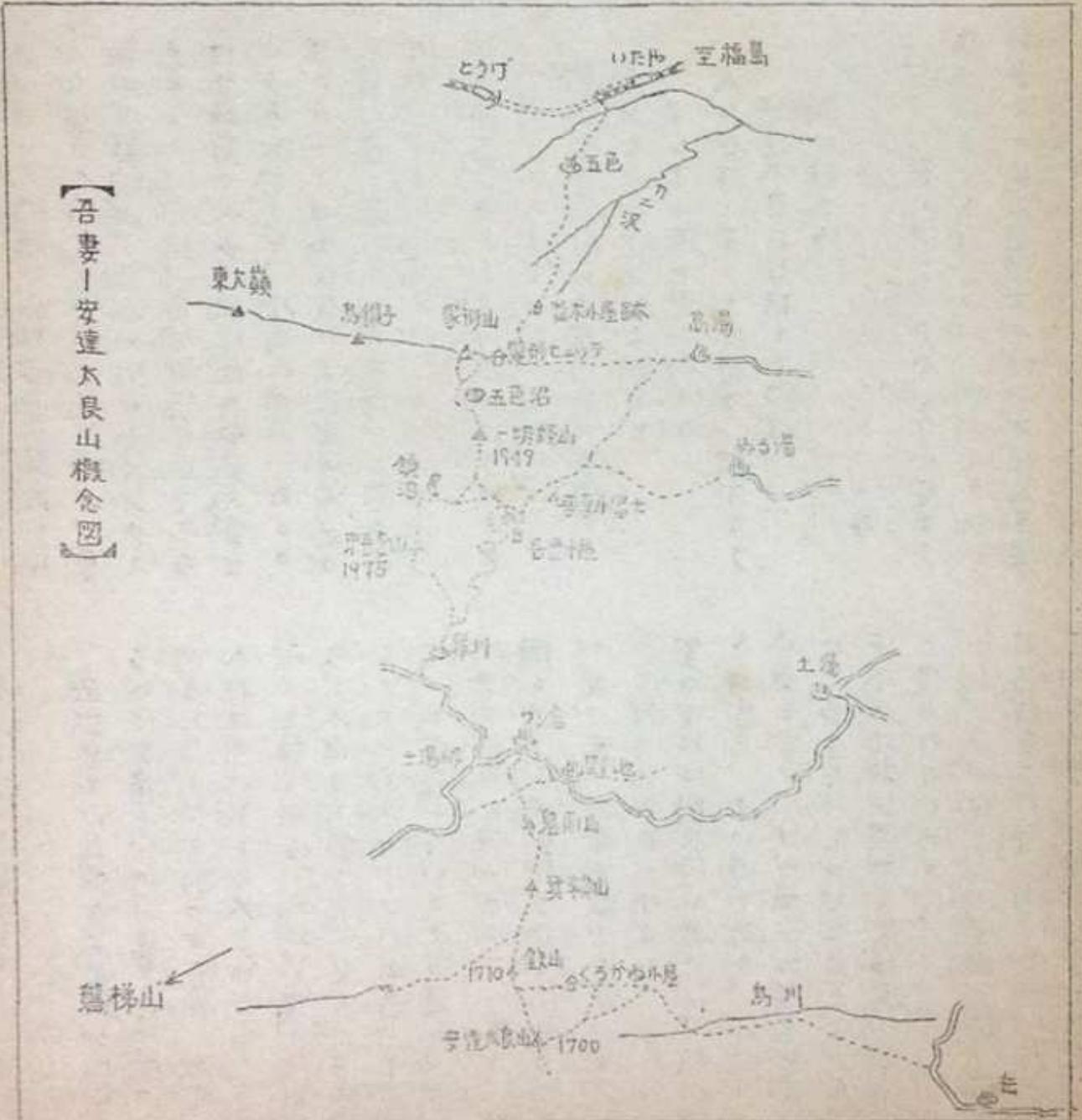
湾土平に下りて時間が早すぎるので
再び一切徑の横から鏡沼へ登り、茫茫々
々る姥ヶ原を横切つてやつと東吾妻山
への登り口を見付ける。一寸分りにく
い処だ。

栗吾妻山頂はハイ松に敵られたドー
ム狀で展望は佳絶である。特に猪苗代
、松原、等々數多くの湖を前にした盤
群山は仲々立派な山容である。反対側
には福島盆地がかすかに左手には藏王
の山塊がどっしどと横たわっている。
幕川に下る途中、沢山の池塘を抱え
た湿原があり、シーズンには尾瀬と同
様高木植物で美しく彩られるであろう。

秋の日の落ちるのは早い。急に薄寒
さを感じて足を早めるうちに、日の落

ちた紅葉の谷に幕川の湯の宿が現われ

吾妻—安達太良山概念図



驚くべき仕業である。

秋の日つるべ落しに消え去りし

紅葉の谷に湯の香りあり

山深き石油ランプの宿、客は測量の
人二人と私だけ。素宿一百五十円であ

る。

秋深き山の夜寒に目覚めれば
宿にいで湯の音のかをする

夜半襟元の冷気に目を覚まし、再び
風呂あびに石油ランプのほの暗くゆ

走つていろ。早々に慾倉温泉の前から
バス道に今直ちに鬼面山へ向フ。鬼
面山、箕輪山、巣山と例の如くスタス
タと歩き、安達太良の山頂に立つたのは
は十時前である。私は此の安達太良と
いう名が好きだ。標高は僅か一七〇〇。
然だが、この山に寄せる東北の人達の
多者が良く衰あされた名前だと思ふの
だが……

安達太良はよき名の山を擱るばると
立ち不立ちでせらうくを見

繁至里を横断して岳温泉へと向う。

今日も又山歩き終え顛々と

すゝきの原を里へ向へテ

人の世はすゝきの原の彼方なき
安達太良を目指して野分

駆け行こう

朝四時半、頬んでおいた通多支那が
してくれた。木立の黒いシルエット

上に、明けの明星が輝いている。

昇る日に頂きの紅葉も出で

中天の月白く残れり

土湯跡あたりには立派なバス道路が
走つていろ。早々に慾倉温泉の前から

岳温泉では立派な温泉宿が並んでい
るのは敬遠し、町の裏手に共同風呂が
あると駅わつて行つて見た。木造一棟
入口は向け放しで人気はなく、窓から
覗くと誰も居ない。浴槽に湯が流れてい
る。入口の木箱を良く見ると清掃料と
して五円お入れ下さいと書いてある。

こゝに向達しないと上り込み廊下に少
しきつと耳を傾けながら一人湯に浸つ
ていると、思ひがけず浴室の戸が開い

て。暗くてこちらに気が付かないのでも
のろう。着物を脱ぎかけて、やつと先
に気付いたらしく、「あら」と一声す

の姿は風の如く闇に消えた。

安達太良の直下、クロガネ小屋より
して、岳温泉まで八百余の向、中をくり抜か
た長さ二米余直径三〇。幅余り丸太を連
ねて湯を導いている。約四千本の丸太
五四五がま。試しに金入箱を手に取

せてやりたいものだと考えながら、四
千本の丸太を並べて来た湯にしみ

と浸つたのであつた。

坂、さつぱりとして出る時、五円の
風呂代をと財布を南にしたが、あいにく

初冬の仙丈・塩見

仙塩尾根縦走記

篠崎介二



「て振つてみたら、先程の婦人はもう確かに上つていったにも拘ららず、一円玉一つの音もしないではないか。それで私はおもむろに十円玉を一つ抛り込んでも先程の婦人の今もねい、東北の此の良き湯に愛着と敬意を表明して来たのである。

秋山の汗かすかにて 湯に散りぬ

ヘコース タイム

（ケ一日）太宮（三十三・一。）→板谷駅（六、四四。）→五色温泉（七・四。）→猿形ヒュッテ（一・四五。）→一切経山（一・〇。）→桶沼（一・〇。）→東吾妻山（二・二五。）→幕川温泉（五・〇。）泊

十一日（十一月十日）晴

前夜新宿を発ち、七時五十分に伊那北へ着く。駅前に着いて、バスに飛び乗り、戸台口に着いたのは朝九時半である。

殆んど雪はなく、戸台口から戸台部落へ連する広い道路には夕陽が照り映えて初冬とは思えない暖気を与えてくれる。

重い荷を担いだ足取りは鈍く、逞

これはスキーツアーの下見を兼ねて歩いたもので、東北の温泉礼泉（二・〇。）→木松（一・五。）→大宮（七・三。）

日の暗天により足を運ぶたびに土埃立上る。爲に一戸肩ヶ荷を重くよう感じさせる。もう周囲の木々は紅葉を過ぎ去り、枯葉を落している。

向もなく鋸岳が正面に現われ、誰言うともなしに道端に腰を下し、荒い息を静める。休んで歩くうちに右手に仙丈が望まれる。雪は殆んどない。十一時五十分にやうやく戸台川の河原に下りて行う昼食をとる。そこでは砂防工事を行つていて、我々が食事をしている時にもサイレンが鳴り、ハツハが仕込まれた事を知られ、あわてて避

勞務者も昼食から戻つて来る頃、我

北沢に向けて公發する。戸台川の各間に入つて行くに従つて太陽も山ヶに隠れてしまい寒さを感じるようになる。日陰では地面も凍りついて靴底に霜柱の崩れる音が落葉と共に

リサリと鳴る。登山シーズンをすまたせいか途中で二組のパーティにしか会わず、小鳥の声も聞かれず、音ごうものが足音と溪流の音だけで、静かな山行である。

夕暮れがせまる頃、丹沢小屋に着く十一月の日暮れの早さを感じる。小屋は砂防ケムの上にあり、そこには小屋番しか泊つていない。今晚は此處に泊り明日は行けるまで行こうと決めた時にはシュラーフに潛り込む。

オニ日(十一月十一日) 雨
七時に起きてみると、昨日とは打って変わつて雨が降つてゐるではないか。一人共無言のうちに今日は停滞ときの十時頃までシュラーフに入つてお

り、朝食とも昼食ともつかぬ食事など

夕食には小屋のあやじが釣った魚を食へ、九時に床につく。

オニ日(十一月十二日) 快晴

三時頃目を覚すと、月の冷い光が寒辺に映り、溪流がちらりと照らし出されてゐる。

暖かい雑煮で朝食を済ませ、六時十分に小屋を出る。先駆けに小屋の入口

にある登山者名簿に山縣さんと辻さんとの名があり親近感を覚えながら、北沢峠へ向つて薄明るい樹向の中へ歩き進めていく。

二時間ばかりで北沢峠の明るい处に出た。空は青く澄んで、身体が吸い込まれそうな上天気である。こゝから見られる北岳は意外な程雪は少く、下部までは砂防ケムの上にあり、そこには小屋番しか泊つていない。尾根より南側へ下つた处で食事をとる。

相手らずすの森林帯を奥を効かして登る。やがて鞍沢小屋への分岐点で、吉水さへ配して尾根の方へ登ろうかと迷つたが、結局時間的に近い鞍沢のコースへと入つていく。鞍沢小屋まで殆ど日陰の為、新雪も少々残つてゐる。仙丈の入口の木の立札に、鞍沢小屋を通りて仙丈へ達するコースは青冰か

せていて危険と記されてあつた。三十分ほどがり休息し、木筒に水をつめ、急な仙丈への登りへと掛つた。南ア特有の蒸氣帯が続いて、展望は余り効かず一時向ほか登つて樹間から背後に、頂上附近が白い肌をした駒ヶ岳が姿を現す。左手には鋸岳が尾根を継ぎて元らる。なをも登つて、けば右手に全く雪に被われた北アルプスの峰々がよく光つて見渡せる。

左手の北岳が全容を現す處で昼食にする。こゝ頃から風が出て来て寒くてたまらない。尾根より南側へ下つた处で食事をとる。

相手らずすの森林帯を奥を効かして登る。やがて鞍沢小屋への分岐点で、吉水さへ配して尾根の方へ登ろうかと迷つたが、結局時間的に近い鞍沢のコースへと入つていく。鞍沢小屋まで殆ど日陰の為、新雪も少々残つてゐる。仙丈の入口の木の立札に、鞍沢小屋を通りて仙丈へ達するコースは青冰か、そこに青氷が出来ていた。ヒツケ

でステップを切り、なんなく通過する。

。小屋をすき、間もなく仙丈カール下

部の谷に出る。ユノは遙くまで残雪がある处だが、今は雪の陰も見られな

い。その右側に北岳・回ノ岳の頭が少し見られる。更に石に目を向ければ、今日の縦走路である通称馬鹿尾

根が延々と続いている。他に中ア・北

ア・甲斐駒から日月等日本の中央部に

位する山々が見渡せる。

三時半に起床、昨夜の最低気温 -9° 。五時半に小屋を発つて頂上に向う。風が強く、皆ズボンを二枚履いている。

妙高、北アルプスの山々が望まれる。前面には太陽の下に仙丈岳の頂が見られ、カールの中程に仙丈小屋の尾根が見え

る。峠のからぐしたカールの中に石室があり、一時半に到着する。

これから雨保まで行くには時間的に間に合わず、次に泊りと決める。早

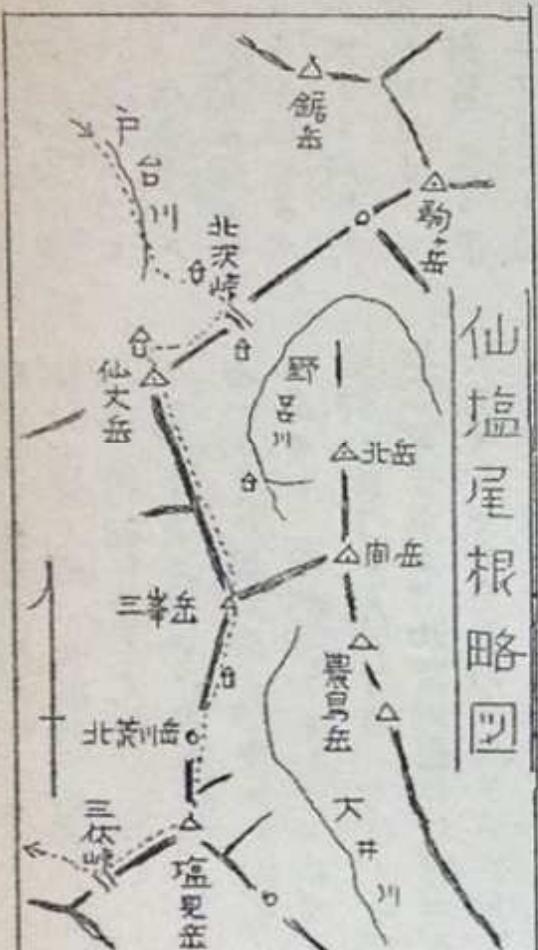
く頂上に二十分ばかり、カタぐし乍ら頑張つて、ようやく馬鹿尾根に足を踏み入れる。相変わらず風は強く、全身に寒さが導つて足は自然に早くなる。大

仙丈岳まで来ると太陽は昇り我々にいくらかの暖を与えてくれる。

森林地帯に入り、大休止となる。紅茶とにスケットの中間食をとる。前方にはこの尾根の到着点三峠岳が、ほん

千を入れ氣象通報を書き取り、天気図を書いて素人予報をする。明日も晴であろう。

日がかかると焚に刻々氣温が低下し、かたく



水田(十一月十三日) 晴

震へる。早々ヒュラーフに入り眼

している。その右側に北岳・回ノ岳の頭が少し見られる。更に石に目を向ければ、今日の縦走路である通称馬鹿尾

根が延々と続いている。他に中ア・北

ア・甲斐駒から日月等日本の中央部に

位する山々が見渡せる。

頂上に二十分ばかり、カタぐし乍

ら頑張つて、ようやく馬鹿尾根に足を踏み入れる。相変わらず風は強く、全身に

寒さが導つて足は自然に早くなる。大

仙丈岳まで来ると太陽は昇り我々にいくらかの暖を与えてくれる。

森林地帯に入り、大休止となる。紅茶とにスケットの中間食をとる。前方にはこの尾根の到着点三峠岳が、ほん

で水筒の水は全くなくなる。この尾根の石手の尾根は準平原遺物と称せらるもので、まだらかな尾根が幾々と続いている。

起伏の多い尾根をさると、雨保小屋の分岐点に十時半。今に着く。行んでいるところが体ラシンまで西北

とても休んでいいれない。早々に腰を上げる。天気は良いが樹間に為、展望は殆んどかない。たゞ駄々と歩くのみ。森林帯の登りき終り偃松藪に入り、一戸困難をきわめる。偃松藪の中には木のボンクのホーリットが破ける。

右側に中央アルバスが大きく広がり、左側には向、岳が目の前にせまる。四時半やく三峰岳に到着、熊の平小屋に向て下る。四時三十分に小屋に着く。

オ五日（十一月十四日）快晴

熊の平小屋停滯と決める。我々が題材として取り上げて、構造工が小屋より一時間ばかり三峰岳方面に登つた處に形成されてゐる爲、一日を費して観察する事にする。今日も風は強く吹きまくる。

夕暮は美しく、南の空がピンクに染つて、前面の山腹に映えていた。夜べやつて来る寒さもさびしく、それと共に星が降る如くに輝き出す。

熊の平小屋六時出発、星がまだ光をとぎめている。小屋から裏手の藪に入る。稜線に達しても、高砂らす樹木がうつそうとしている爲時間の空過み出ると、左側のガレカラ大井川の上流部が眼下に展開する。そこから塩見岳が望まれる。北荒川岳に九時二十分に着く。

塩見岳は、木の外は何にも着く。その先右側が大きく斜れていて、徑跡も殆んど認めない程度で、その上砂礫が凧り付いていて足を進むのに全く苦労する。一步詰ればづくと落ちてしまうので慎重に足場を定める。正面には胡麻塙をふりかぶた様な塩見岳が現れる。がれている处をすすぐと岩疊がゴロゴロしている急な登りにかかる。この辺りから風が強く吹きつける。塩見岳肩に着き、そこから一直線に塩見岳に達していく。偃松の藪にはチラ不ラと雪が残つていて、そこにはカモシカの足跡と思われるものがちぢみとついている。

塩見岳頂上に十二時十五分に到着し再び森林帯に入れば木の外は何にも見えず、木の根と掛けたり、またいたりしながら、本谷山に四時、そして三十分で三伏小屋である。

オ七日（十一月十六日）曇のち小雨
今迄一諸に未だKとE・僕のうちKと僕はここから鹿塙へ下り、Eと後づ三伏峠を越えてやつて来た。
二人は又その足で甲府から鳳凰に入り益食にするが、日は輝いているものと並んでいた。小屋から裏手の藪に入る。稜線に達しても、高砂らす樹木が強めで気温下である。こゝから風が強めで気温下である。こゝからの展望は非常にすばらしい。

一時に塩見頂上から下り出で、傾斜も急をきめ非常に歩きにくく。大分下向ひて下りる。

オ八日（十一月十七日）くもり

今迄一諸に未だKとE・僕のうちKと僕はここから鹿塙へ下り、Eと後づSは光岳まで行け金谷に下りる。

二人は又その足で甲府から鳳凰に入り益食にするが、日は輝いているものと並んでいた。小屋から裏手の藪に入る。稜線に達しても、高砂らす樹木

が強めで気温下である。こゝからの展望は非常にすばらしい。

オ九日（十一月十八日）くもり

昨夜の雨も上がり、今朝は晴天である。

オ六日（十一月十五日）晴

サヨウナラをぬけて八時三十分に早足で三伏峠へ向う。

峠に九時に着く。雲の切れ間に塩見が見られ、雪が白くついている。こゝから二時間で広河原に下り広い道を鹿塩まで歩く。一時のバスに向う。

一時半バスにゆられて伊那大島に着いた。

(後記) 十一月中旬であるので雪があると思つたが、全たくと言ふ程にはなかつたのは残念だつた。しかし寒さは一応は少しいし、風は非常に良く吹く。白根三山に足を延ばすつもりで行つたのだが、全然行かなかつたのは心残りである。

季節はそれのせいか丹波小屋から全行程を通じ全然人に会わなかつたのは史跡を訪ねたつた。

全体としては天気が安定していた為大きな困難もなく行つてこられたのは幸いだつた。

(十一月三日 風凰南御室小屋にて)

或る男の述懐



まことにモフモフする言葉に相応る。そこで此處でその御人かその西子にかけて、何とか理屈をこねては負惜しみの弁を弄するのやむなきに至つた心情を、いさゝかなりとも解釈するというオのではありますせんか!!

ます此の御人はこうほやくのである。

「大体あの時は最初からファイトが渋くなかつた。現役の山行の下調へを履まれて、仙塩尾根を歩く事になつたんだがどうせ白根へ登らんなら今、とめくるに相違ない。するとそこに「細沢一向、堀、塩見」なる記録が目に付こうと言うものだ。さてそこで記録を丹念に読み諸君は、篠崎君が懶り平から三伏小屋まで一日で歩いているのに「細沢一向、堀、塩見」の御人が熊の平、北芦川岳を延々一日を要し、あまづぞ思ひながら徑を廻遊えどんでもなく方向に下りてゐるのに気が付く。さてそうするに熊の平、北芦川岳を丸一日を要した御人の面目はいさかから意氣も上らんドヤーをいかし。

そしてこの男は続けるのである。

「全休列車の中から、けなかつたな。」

例の如く発車間際にとび込んで、車窓

の下に潜り込んだ迄は良かったんだが

、頭の上の座席に坐つて居る奴が面白くなかった。どういふ男だつたな、いきなりことわりもなしに、ボイッと一発放ちやがつた。俺は顎をつまむながら

考えたよ、これはいよ／＼俺の前途も

くさい事にならうだ」と。

果せるかなまづこの男は荒川で死物

狂いの渡渉を行う事となる。彼は云う。

「渡渉の恐怖しさというものは実際経験してない」と判らんものだね。今度こそ流されると胸近くまで来る流れの中

で、渡渉の度に生き残る地じやなかつたよ。」

加えて彼は渡渉の際、時計を壊すといつ不運に見舞われ、しかしそれ位で済んであれば、まだ以後は平陰に終

フたクも知れない。その日の夕方、細天にテントを張つてから、彼は悄然として宿すのである。

「全たくあの時は娘になつたゆ。いく

ら探しても、下ソクの中にはシャツも

千ヨツキも入つていなかつたてわけさ

。何、あんなキタネエ千ヨツキなんか

どうでもいふだらうつてや。それで

もない、千ヨツキはいふにしても、そ

のポケットには俺にしては大粒の天下

の通用金が入つていたんだし。

そこで思切りの悪い彼は、それを何

かで矢くしたのかをつらくと考える

。そしてハタと膝を打つのだ。

実はこの日渡渉ですが濡れになつた

裸になつたのだが、どうせ素裸になつ

たついでとそのまま河原で〇五打つた

のだろう。なにせその方にかけては

たゞが一時間の掛る男である。」

「社事

やつて、寒さに耐え難くて着替るべく、

シマツやチヨンキの事など忘れて、てつ

ううとしなかつた。「転んでも只起きない」この男にしては、大粒の通用金を放過する事、つまりは一天勇断だつたに違はない。

かくして精神的ショックを受けた彼は、その後のあかしな山行の向接的原

因がここで一つ増えたんだと主張する。

そして彼の云う回憶的原因はなんも増えていくのである。

その翌日彼を徹底的に参りさせた

のが延々何時間も続く蔽灌¹⁰と偃松灌

がだつた。だからその日の夕方へとへ

とになつて寝ぼ路に迷ひいつた時、彼

は考へたものだ。

「俺はこの調子じやこれからも錄をことはないと思ったね。だからよつほど北岳から案内知フアルートを下つて、

フサと帰ろうと思つたよ。ところがそ

うなると俺の目の前に、あの轟、轟を

した顧向の顔がちらつくんだ。このま

フ帰れば下手すれば我が深穂の財源に

支障をきたす事にもなりかねない。ひ

いては我が深穂の發展にも影響するや

やも知れぬ、と考えた俺は重り足を引
き抜いて、空風吹きすゞる濃霧の中を
向岳を目指してストボクと歩き出した
と言うわけだ。

悲壯なる決意ではないか。ズボンを
ぼうくにして霧の中に消えていつた
この男の後姿が目に浮ぶ様である。だが
が待てよ、彼はやつぱり北岳からさっ
さと下つてビルでも引っかけて帰つ
て来た方が良かつたのだ。そうすれば
ここで西子を立てる必要もなかつたの
だ。

さていよいよ熊の平—北荒川岳一日
行の当日になる。
「ともかく疲労では散々な目に合う、
金は失す、時計は止まる、ついでにヤ
フ潜りで故人ガフはら痛のつけられた
後では、意氣もさつぱり上らないやね
。加えてこの日は朝から天気が良くな
かつたな。風が雨を伴なつてビュン／＼
吹き付けて来るし、ガスが濃くて四五
木先しか見えない。ニ、三分置きにメ
ガネをみかないとメクラになる仕末だ
」しかしS君の話などから察して、あ
の徑を迷つた原因はどうも微妙なタイ
ミングの狂にあつた極だな。

彼の微妙なタイミングとはこうであ
る。まず熊の平に着いてテントの途中
に合ひ、この先の森林地帯は徑が悪い
と聞く、そこまではいゝのである。実
はそろ少し先にもう一パーティが走つ
ていたのである。この連中天幕を持
つていな」と見え、徑の下方の凹地に
ビル五天井にしてその下でござ
そと動いていた。恐らくそのまゝで一
夜を過したにちがいない。彼はこの奇
妙な連中に気をとられて歩いているゆ
づかな向に、尾根筋の方に並びている
徑を見失つたヒ断するのである。

「何しろそこで徑がハタと消えている
ので俺も少々おかしいとは思つたよ。
しかし振返つても、もうガスの意外に
徑は見えないし、オ一径が悪いと同一
いたよ」

さて、いよいよ待望の登山路に出た
彼は、もう何もなく帰れると安堵した
のだが、そうは向屋バあろくなかつた
。ムサイ男の一発は遂に最後の日まで
彼に付いて高れ余かつたのである。

縣体 兩神集中登山

參加報告

大武昭雄

一九五七・一〇・五・六

☆ 西秩父兩神山

☆ (参加者) 村田俊滿・齊藤良則・大武昭雄

才一日 (曇)

大宮—秩父(市内行進)—三峰—
—中双里—中津川(泊)

の後姿だ。二日間行動と共にするの
は采穂の三名に、直井先生をリーダー^{ゼリフリ}
ーとする母校山岳部員五名の計八名。

車中、懶くたれこめた曇天を気に
しながらも全員元気に秩父線お花畠

駅に着き、直ちに集合場所の産業会

館へ向う。会館前の広場には秩父岳

連を始め県内の種々な山岳会が思い
くの服装に身をつ、み楽しそうに

は紅白の大福二個、一寸わびしい県
体参加章、^ノと書かれたピンクのリ
ボンの4隊章—我々浦和岳連はや4
隊—観光資料等々。大福は急ち腰の
中へと消え去ってしまったことは言
うまでもない。

参加ナンバーの確認の後、登山委員
長清水武甲の指揮で秩父神社迄の
市中パレードに移る。各岳連ごとに
旗を立て、三百余人がナーゲルの
音さ響かせながら行進—一体どれ
だけの意味があるのだろうか。
秩父神社では入山式が行われる。
神主のノリトを聞き、十何年ぶりか
でオハライを受け、市長、市觀光協
会長そり他の挨拶を聞き、入山式を
終了。これからは各隊一一隊から六
隊一のそれくのコースに分れるこ
とになる。昼食は神社内の神武景氣
を思わせるような新築面も広い參集
所一結婚式場でもあるところ。
中双里から登る四隊—浦和岳連、
と書かれた袋を渡される。その中に

て仕方なくキスリングで、恰好を整
えるのに苦労したよ。」という村田君



秩父岳連、熊谷岳連、草加岳連、松山チーゼルーは、昼食後電車で三峰口駅まで行きそこから中津川行きのバスで宿舎に向うことになる。

プログラムには、宿舎は中双里仙峠亭及び附近民家に分宿と印刷されていていたので、なまじっかな旅館より民家の方が待遇がいいんぢやないか、など、胸算用をしていた所、出発前、リーダーの「浦和の方は中双里からトラックが出ますからそれで中津川の旅館まで行つていただきます」という声で、見事当てがはずれた。

中双里迄約4kmですから、といふ声に元気づけられて、四隊のトップを切め込んだ車は、暗く且つひどい要路を中津川沿いに宿泊地中津川部落目指して進む。宿舎に着いた時は、時計は既に六時を廻っていた。

中双里らしい部落は目に入らない。丁度通りヶ、たソダを背負ったオバさんに問うと、後一時間半位だという。一同大いに憤慨。然し仕方がないので更に寝ぼすこと一時間余がてそれらしい部落に着く。仙峠亭の玄関脇には、歓迎・県体山丘部門の文字が見られる。

仙峠橋という名の鉄橋の上を写真撮影したり、昼食の残りを整理したり、あ茶の接待を受けたり、或は又バスは、曲りくねった凸凹道、途中道巾拡張工事中の所や、路肩危険。ほととじう所が多い道を慎重にノロノロと中双里を目指して進んで行く。

この調子では、と思つていると案の定、決すとかいう地獄の先でガケクスレのためストップ。リーダーの

幕が下りていた。

四〇余名を身動きも出来ぬ位詰め込んだ車は、暗く且つひどい要路を中津川沿いに宿泊地中津川部落目指して進む。宿舎に着いた時は、時計は既に六時を廻っていた。

宿舎は土地の旧家らしいじつりした造りである。

「こんなに大勢泊めることかないのでは」と宿屋の人か言うだけあって部屋割が決まつても飯かなか出ず、飯が終つても床かなかくともいいヒュウ始末。明日が早いので何度も催促に行く。そのうちやつとり、あ茶の接待を受けたり、或は又地元の中学生をつかまえて学校の様子を聞いたりして時間をつぶしてトランクを待つ。あたり一面もう夕暮れ薄暗い。明日の起床が四時と発表されているので、皆気が気でない。

第二日（夏後雨）

中津川—中双里—大峠—西神山—

一両神神社——一位のタワー白井差一

——三峰——大宮——浦和

「四時ですよ」というやさしい女性の声に目を覺ます。

五時、昨夜のオーパンカーが迎えにくる。五時半、中双里に着き、直ちに山頂に向って出發。

空は昨日以上にどんよりして今にも泣き出しそうだ。それでも現役部員の連中に利激されてガ元氣一杯、中双里の仙崎亭に泊った秋岳連始めその他のパー・ティは既に三〇分前に出發したので、先ず我々のパー・ティは殿をうりたまわった。いや殿は望む處、氣樂でい、からである。

然し宿舎等の割当は、やはり遠方

方が良いのではなかろうか。

中津川にかゝった仙崎橋をしませぬから渡ると、道はすぐ左に折れ石に折れして急登となる。よくもこんな辺にと思われる程の斜面に堤が作られ、そり間に丁度うれで細い道

を登る。下りは仙崎亭の人達が盛んに手を振って我々を見送ってくれてゐる。やかて道は少し狭はみ出

した木立の中に入る。傾斜はまた相變りす急である。代採のうしろに出ると、J山岳部の一人が腹痛とかで下山しようとしている

のに出会う。渋谷・現役パー・ティは健在、それどころか現役ウ・S君達二人は、殿はもう沢山とばかり頑固に仕込まれた例のペースで見

る見るうちに後半が見之なくなつてしまふ。白井先生は、アイゼン

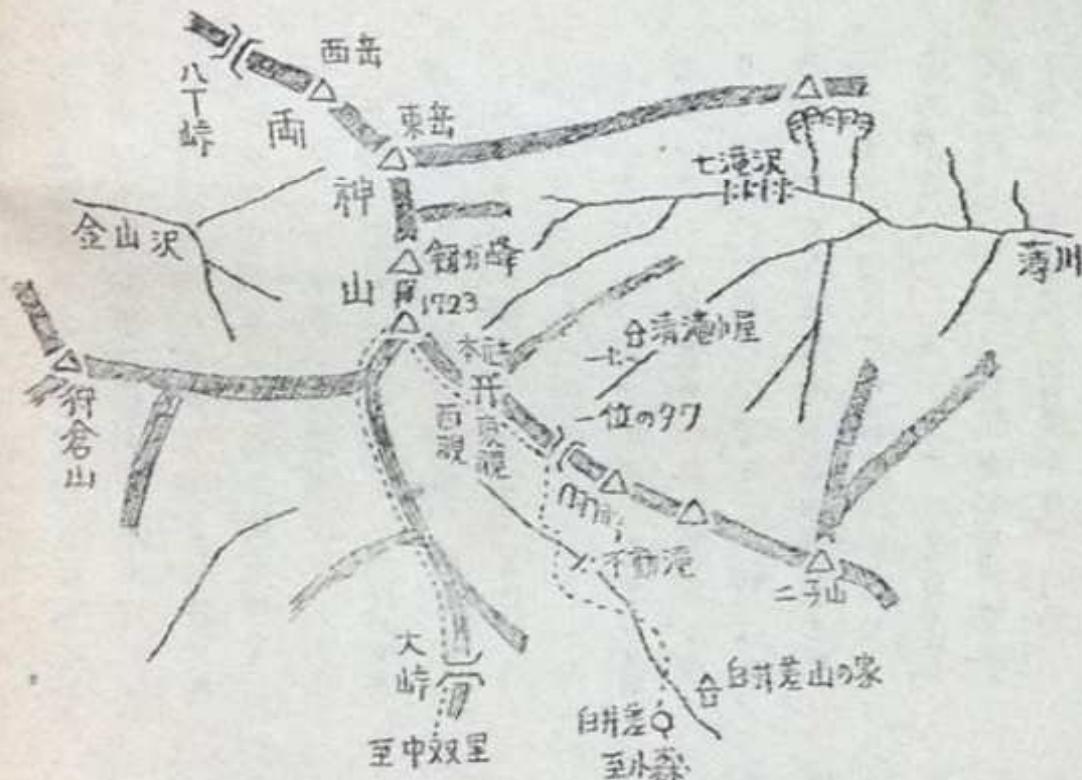
を過ぎたときのペースとかで、後からじつぐりと登つてくる。

空模様は益々悪くなつてくるよう

で、近くの山さえ満足に見之ない。これで雨に降られては、殿では濡れ方も大変だから、歩し飛はした方がいいだろうというのでツレビッテを上げることにする。

朝も早く、丁度連やひ岳連の散パー・ティを後にしてしまう。

二時回程で大峰に飛び出す。大峰は、中双里、中津川、白井差から夫々の道が十文字に交叉して



いる。度行きは益々悪く大分ガスツ
てくる。そのガスの匂を縫うように
とう／＼雨が降り出してくれる。それ
ても木立の中なので大して濡れない
。大崎からの尾根道は、さほど急な
登降はない。峰から一〇分ばかり登
て出て地元のC甚連をも抜き去る
程、皆至極好調である。先行の現役
二人も快調らしく依然見之ない。

峰か見える。前方の霧評と越之れば、
もう頂上まで一息。こゝから我々が
稜の三名か一団のトフアに立つて照
るの露払いを勤める。スネウムにリ
カジワ／＼と全くなくなくなる。

無常は次第に岩に変り、兩脇神社
の本社へ直さ石に見送るあたりが
う道は一寸急になる。もうこの辺は
殆ど岩で、所々に鎌かつりられてい
る。

三〇分も登ったうか、正面に一米
半位の小さな岩の横たわった處で急に
道が消えた。右手の木に新らしいナタ
目がついているが、それに導かれて下
るヒ、五六歩で道は消えている。先行
していたH高校の人達と一緒に手分け
して探すと間もなく、岩の上に登つて
いた村田君が「道はこちだぞ」と叫
ぶ。よし、とばかり一寸した一枚岩を
登って上へ出る。

一枚岩の先には古ぼけてはいるがち
いんとした指導標があった。右に折れ

さじ谷と隔て、右前方に西神らしい岩
のA君達の到着を待つて早々下りた

峰か見える。前方の霧評と越之れば、
もう頂上まで一息。こゝから我々が
稜の三名か一団のトフアに立つて照
るの露払いを勤める。スネウムにリ
カジワ／＼と全くなくなくなる。

無常は次第に岩に変り、兩脇神社
の本社へ直さ石に見送るあたりが
う道は一寸急になる。もうこの辺は
殆ど岩で、所々に鎌かつりられてい
る。

これを便わせていて早速端

れた身体を乾かし、砂糖つきの熱
い紅茶の作つて飲んでいると、先行
していたS君達が先へ行こうとし
やうにとおひらから見えにやんご
く。邁へして藤井先生を勤め
少し早いケル良、誰もアホに思
ておいでくれた風波の残り平安祭
・秋葉の仲間がカンバしてくれた金
で買った果物や、並井先生アラモ
ズや飴ドーナツの持配もあり、ほ
か／＼豪勢な公食であった。

奥の院の前で登頂の記念でもあり
且つ証據でもある写真を撮り、現役

委員会、後から来た丁番連の人達

に譲り、現役ヒ崩つて西神本社を微にする。

雨は依然小止みなく降つてゐる。

暫く下ると観音への分岐に出る。この天気では敬遠。一位のタワを過ぎ一気に下ると小森川の上流、下動滝を横に見ながら次に沿つて下ること

一時前半ばかり、白井差山の家に着く。太勢方々で暖きとゝていう。

午后三時トラックがやつてくる。

オーブンかヒ配していくが、幌がついているのでや、安心。

それにしてもこの二日向は散々であった。市中行進、夜のトラック、扇中の山歩き、そして最後のすし詰めの幌つミトラック。

約一時前尻の痛いのを我慢した後三峰てや、と解放される。帰りの電車が主要駅のみ停車の上野直通(自然科学庵庫)であったのは、せめてもの慰めてあつた。——運営に当られた役員の方々御苦労様でした。——

西神山麓の記

吉田泰彦



は、これが喰えるかどうか疑わしかつた。ある友人は熊が落したというち、ぱけた製造、しかもゆでたのを御馳走になつたと得意になつていた。すべて食物が十数キロも離れた町より運ばれる不便さから、何でも食べる習慣があるらしい。

西神山には五つり分岐がある。そして尾根を隔てた殊川渓の一筋奥に電燈のない滝前分校がある。生徒十、人に二人の先生が勤かな環境で生活していた。十一月下旬で木の葉はすでに落ちてしまし、斜面に作られたコンニャクも刈り出され、もう冬仕度だつた。家の前には遙柿がきれいに干され、それが残照に映える様は見事であつた。

滝前分校のすぐ裏手に大きな滝がある。秋久で一番にううと用う。子供の先導で滝の直下に行くと「先生百米はあるたべ」と言つ。何言ってんだ、せいぜい五六十米位ほどのだしと答えたたら、「んほら先生登れ

夜遅くなつて、ヒノコの農家に立ち寄ると、部屋一杯にもつとられた柿のなかから一段ご大きな奴を囲炉裏にくへて、どうぞと出された時

るか。」ときた。お安い御用だと取り付いたらなかへ、凄い。岩松を覆りに一時間も汎をかけてや。と上に出たものだ。帰りに分校に寄ると、さつきの子供達が径二十センチ余もある大きな蜂の巣を抱えていたのには驚いた。

この分校の庭は極めて狭い。ボーリュ延びて一寸へまをすると谷川の流に海がんてしまう。それでも皆元気によ動いていた。ソフトボールも又つかつた。バットの真中に球を当てると宿直室に当つたり、裏手の山に籠ひ込む。それ程山に接近していふのだ。何しろ日照時間が朝の二、三時間しかない。対岸の山なみが真昼の陽光に輝いている時、こちうではそうちランプの準備にとりかかるのに。

西神山へはこゝから三時間程で行け、白井差という處から登るのに。そうしたか途に行けばがつた。子供達も又こうだ。並くに住んでいても余り行かないらしい。汽車もまだ見たことのない子供達に、西神山からちら見えるにうとうと言つたら笑つて笑ひながらた。それどころかラジオも余り聞いたことはないらしい。テレビは勿論見たことはない。それだけに無邪気なものだ。日程最後の日、女子學生が女の子を集めて歌唱指導しているのを見て、これが子供達の最も幸福な瞬間だった。と思つたものだ。そして渓川の冷い風が這いつまと宿直室に当つたり、裏手の山に籠ひ込む。それ程山に接近していふのだ。何しろ日照時間が朝の二、三時間しかない。対岸の山なみが真昼の陽光に輝いている時、こちうではそうちランプの準備にとりかかるのに。

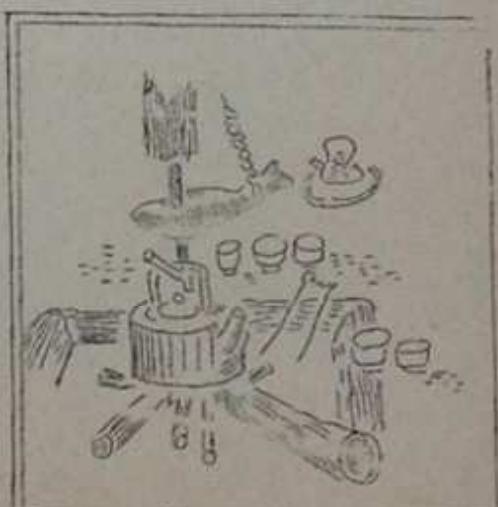
(ミニ年一一月 教生実習での記録)

。天近く雲を貫き聳え立つ
山の如くに此の世生きたし

山に思ふ

—山彦—

。人の世遠く 山に入り
人の世のこと 慕わる、
人の世生きる 苦しさは
迷れるすべぞ ながりける

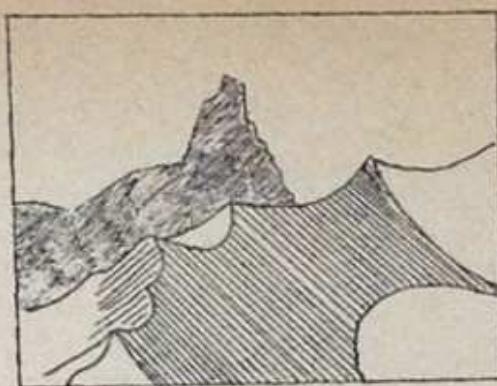


秋の鳳凰三山

—近藤澄江—

★ 九月二十三日

☆ 単独行



コースを確りめながら登車のベルを
待つたのであった。

九月二十三日（中雨）

寛山駅で降りると夜明け前の薄暗い空から小雨が落ちていた。

駅前の宿がばかりの家並と並ぶ
と甲州街道に出る。甲府の方から来る荷物を廻越したトラックが大き
な轟音とともに走って来ては又轟の

中に消え去って行く。寛山橋を渡る
頃、小雨の中で空を仰ぐと、頭上が

スの中から四層の被服がかすかに空
された。これではと今日の天気回復
を期待して歩みを進める。

橋を渡り直ぐ役場の右手から指導
標に沿って行くにやがて道はジグザ
グの登りとなる。

暫く行くと前の列車で未だという
S時計会社の山本郡という七八名の
パーティが木蔭に憩よけて朝食を
にっているのに出会った。彼等は遙
い歳して才を發揮したが、後からこの

鳳凰を訪れてみたいという私の小
さな念願は、山を歩き始めて中央線
を利用するようになつた頃からずつ
と持ち続けていたものである。針の
ようになつた地蔵のピーコは何時見
ても印象的だった。今年に入つて二
度程南アを歩く機会を得てから、急
にこの山が私の手の届く様な身近に
あることを感じた。

前日までの試験の重圧感から解放
されるところの感情が俄につのり、單

身出かける決心がついた。
九月二十二日

連休を一日遅らせた今夜の中央線
は思いの外、人も少なく、座席は
樂に取ることが出来た。こんな恵

まぬた條件にも拘らず何か物足り
ない淋しさを感じるのは単独行は
るがための一絲の不安が私の心を
支配しているためであろうか。

何とか沈みそらはるを持ち直そ
うこ、ザクザクから地図を取り出し

ハーテイが来るといつ安心感は私の
今迄の不安をかき消してくれた。

やがて平川崎に着き、から少し
下ると小武川の川原に出る。こゝに
かゝる吊橋を渡ると平坦なトラック
道路に出る。このあたりには何回も
渡渉せねばならぬ場所があるが幸い
水量も少く、靴のまゝで難なく過ぎ
る。あたり一面の開けた草原には早
や秋の氣配が満ちていた。

青木鉱泉への道を左に見送り、御
座石鉱泉へと道をとる。やがて白樺
の散在する林に入ると材木を伐り出
している飯場があり、御座石までの
時間は固うと、あと百米も歩けば、
と親切に教えてくれた。この百米は
一寸長すぎるようだったが胸もなく
目前に二階建の小じんまりした御座
石の庵が現れた。ほどと一息つく途
端に空腹を感じる。

此處で約一時間鳳凰の様子などを
聞きながら朝食をとり、再び宿の裏

手をうちをさす。此処からの登りは
ぐんぐん高度を増し山直りしくなつ
てくるが、一時上りそうに見えた兩
ヶ所の坂がら再び強くなり、同時に
寒さが一段と感じられて来た。こう
なると卓犖行は一寸心細くなる。
雨の中テナツクを下ろし用意して
きた傘を抜き震えながら簡単に昼食
をすませた。

燕頭の登りにかかる頃、昨日登
って御座石へ下りる後人からの登山者
に出会い、僅かに励されてやっとの
ことて旅苦の一面に及ぶ燕頭に着いた。一時は引返そうかとも思つたが氣
分も、此處まで来てみると登ろうとするファイトに変つた。一息入れた
い処だが一歩先も皆目見当つかないよ
うな天気なのでゆっくりしても
あらねず歩き出す。

これがやはり判に平坦な登りである
が、高山性を増して原生林の中を何
の展望もなく、たゞ小屋を目指して
くと、さすがに安心感などと湧き
始しくなつた。

ヘコース・タイム

穴山駅(五・〇) — 御座石鉱泉(八・三) 着
九・三〇発) — 燕頭岳(四・〇) — 凤凰
小屋(六・三〇) 着

九月二四日(晴)

山小屋の夜はしんくくと寒さが襲
いかつてきた。安眠の出来ないま
まに山の早い朝はやつて来た。

何やら人の詫声にシュラーフから
這い出す。三時三〇分、寒さを押し
切つて小屋の外へ出てみると昨夜と
はうつて变つて、からりと澄みきつ
た空には星が最後の光りを美しく放
つていた。全く始しくなる。往復を
すませ、我々四人は五時に小屋を出

た。実は昨夜小屋で、私と同じよう
に単独行で来たという人が三人落ち
会い、お互に了解の上四人でバー
ティを組むことにしたもので、一諸
に鳳凰へ登り、観音岳の頂上で別れ
て又各自のコースをとることにした
のである。

私は三山を歩いて再び小屋に戻る。
てくるので、用意したサブザフター
の身軽である。

日の出にはまだ一寸早いようだが
割合に明るい。朗らかに氣持で一氣
に登り、森林限界を出た時、雲海の
彼方から太陽は将に昇らんとしていた。
刻々と陽は雲海から浮ひ上る。
バラ色の空、金色の雲、山でこそ
味わえるこの景観はその感動とともに
永久に忘れられないものである。

この辺から地蔵への登りは砂礫の
足可配で普段では大変なものと思わ
れるが、昨日の雨で湿っていた爲め
場はしきりとして登り易かった。

朝秋父の一端から地蔵岩の陰からわざ
かに見える。目前の観音岳の陰から
富士山か雲海の彼方にぼつかり浮ん
で見える。塞の河原から地蔵岩の頂
近くまで登ってみた。岩は手に冷た
い。足下には早雲駒が小しんまりと
控え、その右手にハケ岳がや・かす
んで見えう。早川尾根の稜線か朝日
に美しく輝いてアサヨ峯へと続いて
いた。

稜線も観音岳へと向う、右手には
直ぐ前に白根三山が手に取るようにな
る。更に塙見、早川岳が積雪を
いたずくまじりと望まれ、彼方には女性的な山容の仙丈岳
が去りし日の思ひ出を新たにみが
えらせてくれた。

観音岳にて早川尾根へと戻るルート
と別れ、更に薬師岳に至れば、扇・
農鳥岳は一戸近々見える。ふり返
れば鳳凰の稜線はハイ松と花崗岩の
砂礫とのコントラストで素晴らしい。
飽くことのない眺望に未練を残しつ
ゝ、観音岳から下る途中改めて地蔵岳
を仰いた時、この独特の岩の形態が
私の心に不思議な愛着を起させた。
一〇時半再び小屋に戻る。今日限
りで山を下りるこいう小屋番がのん
びりと日に当っていた。客を全部送
り出してしまった山外屋の午前はま
ことに静かである。一時間程休憩の
後、又一人となつてトントコ沢を下
った。原生林の中のこの下りは全く
果てしなく続くのがと思われる程
であった。トントコは水の流の音で
はなくて、旱てしなくトントコドン
ドコドコ下りてゆく私の足音のように思
われてくるのであった。

コース・タイム

- 鳳凰小屋(5:00) — 地蔵岳(6:00) —
— 観音岳(7:00) — 薬師岳(9:00) —
— 凤凰小屋(10:30) — 青木鉱
泉(11:00) — 祖母石(11:45) — 蓼崎(12:00)
— 一泊宿(13:00)

ザク口石

山のこぼれ話

筒井滿榮



て四ツ這いの状態だった。予定を少し過ぎた頃やっと尾根に取り付き、こゝでも膝までもぐる雪の中を駆々と歩いて行った。

人情嘶」といつたら何か浪花節調

になるけれども、ザツクを背にして頂上は人が十人も寄れば一杯になる位の狭い頂だった。思いがけずたつた一人の先客が私達を迎えた。よく未ましたねしそれだけ言って熱い／＼コ・アモニ杯黙つて渡してくれました。それだけのことです。でもそれ以来、私達のどちらかのザツクの片隅に小さなコ・アの年がしは持っているのではないでしようか

アルバスの一端で会った老人の話のふとすれ違った小さな子供達のこゝと二人は感傷にすむるというかも知れぬが、今年歩いた中でのあれこれ、思い出すま、に書いてみまし

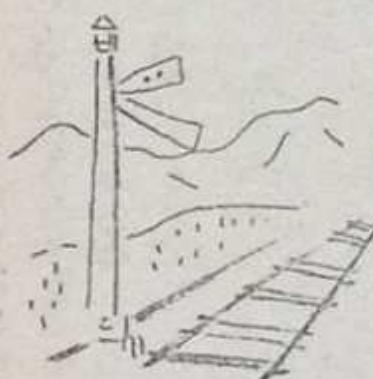
た私達は沢沿いの日溜りに腰を下ろし、春の陽と小鳥のさえずり、せ、うさの囁きに囲まれて、この自然の快いヘントで眠りを誘われたようでした。ふと気が付くと予定の汽車の時刻まであと僅かしかありません。あわて、私達は走り出しました。小さな下町のそれでもアスファルトの道をナーケルリ音の恥しさも忘れて

；しかし、君の名は、よろしく汽車とはついにすれ違いになってしまいました。

然し、汗まみれになり息せき切つて飛び込んで来たあられもない私達女性の姿に同情して下さったのか、駅長さん始め取扱の方々か、お茶にお菓子まで添えて申して下さり私達を休ませて下さいました。

この十月、再び秋の山を訪れに丁角に思い立って、曰既に私達は中央線の人となつてありました。急な出かけた。予想外の残雪に道もはつきりせず、二人は強行屋根をめかげ

(一)



(二)

三月の或日、私は友人と奥多摩に

計画だったため、見事道をまちがえ

(三)



秋も向近い頃、日光に向つた時の
ことです。しとくと降り續く雨の中を、廻々にもれる灯を轆轤りにさて
どうしたものかと考えてみると、丁
度近くにあつた駐在所のお巡りさん
が、この角ではと、今晩は止めて様
子を見てからになさい」と私達を駐
在所に入れて下さった。

別に要いことをしたわりではない
もの、始めての駐在所泊りに固く
なつておる私達を御入歸で何くれと
なく御世話下さり、ふとんまで敷いて下さった。

外屋で泊れは素泊りても何百円と
かられるのでしよう、と私達の乏し
い儀具合を察しての御世話に、翌
朝心から感謝して、良いお天気ではな
かつたものの、お花畑を見に行けた。

(四)



スキーリー車で始めて妙高へ向つた
時のこと、女性三人の座席もとれ、
ほつと一息、汽車は上田あたりまで
来ていました。ボックスの一隅にお

年はもう私達の父位の年配の方が坐
つていましたが、やがて私達に次の
よう口お詫をして下さいました。



冬　来　リ　な　ば

—山彦—

スキーリーというものを知らなかつた
頃の私にとつては冬は全く苦手な季
節で、それこそミノ虫のようになつ
とちやこまって春の到来を待つよ
り手がなかつたものだ。

それが、一と度スキーリーなる魔法の

思い入りない所で、思ひかけない人
から受ける親切、こういったものが
私達の山行みほりくとした美もい
花を添えてくれるもののです。

でしょつじに、その他秋の山の笑
しさとかいろくのお詫か解け、
樂しい汽車の旅でした。

それにもしてもこのザクロ石のお詫
は私の心に深く刻みこまれ、いつか
そりザクロ石を私の身につけること
が出来るかしら、と美しい山に囲ま
れたその川の澄きとあつた水の下の
川底の石が目に映るようで、いつの
間にか私の心の宝石箱の中に、まだ
手を觸れたこともないザクロ石が輝
くようになりました。

板を履いて以来、今度は冬の来る
のが何と待ち遠しくなつたことか。

秋が次第に深まり、黄色には、た
木の葉が一枚二枚と落ち始め、庭の
柿の木に取り残された柿の実が、あ
りかえをするのである。

うせる頃になると、埃の積ったスキ
ーを取り出して部屋に立てかけ、日
記などに半日がかりでラッカーの塗
りかえをするのである。

ラッカーやのはりあこは過ぎし日の
ツマードのあれこれと思い出させ、サ
ンドペーパーでこする单调な仕事も
スキーイヤーにとっては楽しいもので
ある。

そして十二月に入れば、あの冷た
い空氣が待たれ、こんなに暖かく
はしようがない。とか「早く寒く
ならないかな」とか言つては、ス
キーの味を知らぬ同僚から怒られた
りするのである。

昨年秋の総会の時、会場に集
つて来た男性のつわもの共は、

そこに来ていた紅一美のしとや
かな女性に、先ずけびんの顔を
したものであった。その彼女が
今日ではもう押しも押されも
せぬ渋穂の最も活動的の一員
として認められ、いや尊敬さ
れている筒井さんである。

高校時代は女子部には山岳
部がなかったので、自分で方
々の山へ出かけられたとのこ
と。(そういえば、山岳部創立
以来数年間は、わが頑迷なばか
りに木石漢の顧問は山岳部を
女人禁制にしていたものだ。)
卒業後住友銀行に勤めるよ
うになつてからは、銀行の山
岳部に入つて活動を続りられ
た由。

であるから、筒井さんは決し

て最近の女性ハイカーのように登
山ブームの流行の波に乗つてわい
類ではない。岳人として本当に山
を愛する心を持った我々の仲間
なのである。

何うよく山へ出かける。今
年の春頃から余りこう出かけ
ばかりには寧て心配します
ので、これからは月に二回に
制限することにしました」と
言つて、月に一回もなか
に行きなりでいる男たちを羨し
がらせたものだ。

忙しくて、と合同山行も
サボる諸君よ、彼女は山の
ために勤めがあうそかと
言われないために、平生人
一倍珍重(いつも没落して帰り
は遅いらしい)例へは土曜の
飛行で出かけるときは前夜荷

造りしてあいて、土曜日残業をすませてから急いで家にひって帰してザックを背負って大宮駅へ、又層々立旺日はナーゲルその他とザックへしのばせて朝から荷物を持って出勤し仕事が終つてからその足で出かける、という程の努力をしているのを御存知か。

女史が女性というハンデギヤツプを克服して男性に劣らぬ足跡を残しているのは、勿論彼女が山に対する本当の愛着を持つてることによるのであろうが、それを可能にする頑張りと、更に御家庭の理解があることを附り加えておきたい。

御父君は理学博士で丁度の教授、職回も嘗て教を受けたことがあるとか、そしてスキーは一級、お母さんは二級とか、そのようなスポーツに理解ある家庭であることが、大いにプラスになっているようだ。但し筒井女史はスキーの方はま

だ山程のベテランではないようで、嶺岡等苗場山のツアードに筒井さんと始めて一緒に出かけた時、まあ村田の程度は分つてゐるからね、が、筒井さんがどう位うまいかで配てね、何しうお父さんがベテランだう、サトツとやられたら、俺と村田か頭を下げて待つてもらわにやぢらんからな。で芝原崎でいよ／＼スキーリはいて揃つて八木沢へ向つて滑り出して、もやれ／＼これなら我と同じだ、こ始めて安心したわけさしと変わらぬ安心のしがたを述懐した如き程度らしい。然し溪谷には目下スキーの方の人材が極めて乏しい状態なので、その意味からも筒井さんのスキーにおける今度の活躍を期待したいものである。

最後に少し女史にお願いをしよう。その一つは、女性の方のリーダーとして積極的に女子会員を括め、どんどん山行に連れて行っていただきたいことである。

何といつても女性は一般に出かけれる機会が少く、又男性を主体とした山行では、と尻込みをしがちである。それに我々の女子会員の数はまだ少いために、どうしても／＼は計画が男性主体にならるのは止むを得まい。だから筒井さんあたり下請け

女性の意見を代表していよう／＼
を面にも力を貸していただきたい
山詣のもち方、会報のあり方
算の運用、山行計画等々、これ
ニである。

にオーラ、女子会員をもつと運
して欲しいという矣に用しては
ろく難しい事情もあるうと思
るが、お勤めの方の人達と行か
れるが、初回のうち一回くらいは、会の
草を引つ張つて行つていただきたい
あ願するは無理な註文であろう
ともあれ、今後も活躍を期待しま
す。



連休とはいへ十一月も未だ乗物も楽だ
ろうと思ったのはなんだ見込み違い、当今の登山
ブームはこうして／＼、少々の寒さは雪などは
おかまいなし、人々の出足は相変わらずである。
新宿駅の稚皆は更同様、一一五五の列車の跡々
たる行列に辟易して、之も既に満員の〇一〇の列
車に入り込み、直ちに四等寝台をきめこむ。
然し塙山あたりから目立つて空いて来て、茅野
で降りる頃はガラ／＼になつていた。

オーラ（快晴）

早朝の茅野駅前のバス発車場は又一風貌、発車場
行きのバスは結局五台でこの物好き運転で並び去
つた。こんなに大勢、しかも殆どが女性を覺じえた
たパーキング、中にはワカンまで持參した御覽組
もいるが、ピッケルもなくキャラバンシエースで
サブザックという軽装の多いのには驚く。あれが
用ひたのが、それとも私が人一倍慎重居たのが
のろまで一番あとの車に乗つたのだが、並んで
前の一台がエンコしているのを追抜く、よくある
圓だ。蒸氣の凍結していく車窓のガラスを通して
北アの槍穂高が朝日に白く輝いているのが見
る。予定通りの快晴である。

農場で下車、背の高い霜柱や凍結した土を踏んで進むに歩き出す。柳川を渡り美濃戸に着く頃には、にぎにぎしいパーティは全てはるか後にとなり、一人歩きとなつた。赤岳鉱泉への道を左に見送り、行者小屋へと次第に細くなる道を辿る。

美濃戸中山(地図ニ五〇。〇ピーカ)と阿弥陀岳に林まれた倒木の多い荒れた地帯に入る頃、雪をついた樅岳の西壁がぐつと現れてくる。面白いルートのそれそこな

一寸魅力的な壁だ。間もなく積雪が現れ、行者

小屋附近は一〇.5ニ〇cm位である。こ、からルートを

阿弥陀と中岳のコルへとる。下の方は一〇cm位もぐ

り、間もなくカチカチに凍結した雪となり、ナーベルの鉄も効かない。アイゼンをつけるのも面倒なので、ピッケルと假松の枝を棘りに強引に登る。距離は短いが、こ、ていさ、か消耗する。

コルへ飛び出すとパツと視界が開け、右現の尾根のはるか上に富士が聳えている。富士も雪が意外に少い。ザックを其處に置いて阿弥陀岳へ登る。頂上はべつたり雪に覆われ、石北藏が零そに立っている。ハケ岳主脈を見るにはこ、は良い展望台で、又一方には南アルプスの鳳凰駒北岳・仙丈、中アの宝鏡駒・北アの燕鶴高槍

：後立山：妙高：の連峰がくつきりとスカイラインを引いている。

雨ひヨルへ来るとホツカ人未だした。中岳を越えて赤岳に向う。尾根の雪は一〇cm位が、乾燥していて蹴れば小さな雪煙となつて甲州側へ轟んでゆく。岩峰である赤岳頂上へはぐろつて南側を捲くよう白いバンドのよう毎度の道が続いている。西倒なので途中で岩を登つて頂上に立つ。展望は三六〇度、東には金峯から甲武信岳へと議く奥秩父、歩し手前の可愛い岩峰は瑞牆であろう。そろく、寒くほつてくる。頂上小屋に入ると四五人の人が見たが、まだ莽野からは詫も上つて来ていないとのこと。

この連休を最後に山を下るという小屋番の詫では、来年は行者小屋との間にワイヤーを渡し、ワインチで物を引き上げてまずこの小屋をプロック建築にし、水やガソリンを上げて自家発電やら風呂も沸すとか。親父は誇らしげに語るが、この小屋が始めてアツツケ普請で建った年、私が泊った頃の茶林さが懐しく、親父の話にこぢらは余り嬉ぶ気にほれないのは、俺達だつて山にしておきた

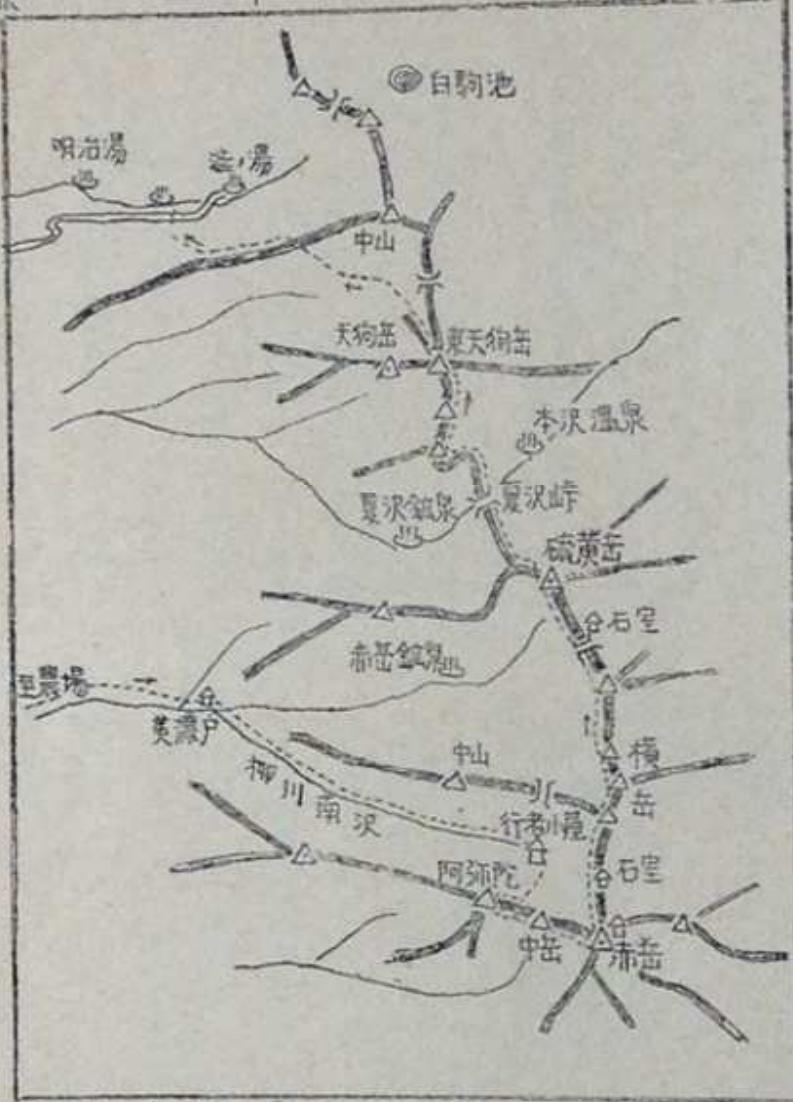
もう十分、ハイキングの山になつて了、ていうようだ。

人々が到着し、夕暮頃には満負となる。こちらは例の
如く稻荷寿司だからお茶をもらつて簡単にすませてしま
たが、満負の小屋の中は飯を炊いてもらう者、外の雪
を掻き取つて来てそれを融かしてから米を炊き、さて炊
すを始める者、大変な騒ぎ、暫く外に避難する。神々し
く山の日没、低い山から
夜々に暗いもやに融け込
み遂に三千米級のスカ
イラインをシルエットに
太陽が最後の光芒を收め
ると満天の星がその座
を代つた。何という星り
あじたゞしさだ。
下界の灯もちかくと
まばたいている。左は甲
斐、右は諏訪の灯だ。

才二日（快晴）

冬の日の出はおそい。

コソフェルにメタてお茶
を沸かして簡単な朝食をすませザックを荷造りしてから
御来光を迎える。六時三十分である。陽は丁度金峯あた
い。皆が炊事を始める頃一人出発する。赤岳から石室ま
で急降する斜面は、早朝雪の凍結でひどいのではないか
と予想していたのにが意外に樂である。北面のため雪が
融けないからだろうか。石室にもかなりの登山者が入っ
ている。尾根道の一寸下に夏テントが一つ張つてある。
間もなく横岳にかかる。岩尾根があるので、雪がもう少し
附いたら厭な處である。何年か



て急降する斜面は、早朝雪の凍結でひどいのではないか
と予想していたのにが意外に樂である。北面のため雪が
融けないからだろうか。石室にもかなりの登山者が入っ
ている。尾根道の一寸下に夏テントが一つ張つてある。
間もなく横岳にかかる。岩尾根があるので、雪がもう少し
附いたら厭な處である。何年か
前、氷雨の中を氷の張った此處
を通過するのに苦労した事があ
る。硫黄の石室は直の直ぐ東側
にあるが、屋根が直と同じ高さ
なので、ガス、たりするヒーす
分りにくい小屋だ。

非対称山稜で西側は鋭く切れ
込んでいるが、そのガレの縁に
沿つて緩く登ると、のっぺりした
硫黄岳の頂上である。夏沢峰か
ら登つて来た大勢の人が此處で
眺望を楽しんでいる。振り返れば
赤岳の主峰が朝日を浴びてす
く立っている。此處で南八ツも終なのでゆっくり眺め
を楽しみながらメタて雪を融かしてコーヒーを沸かす。
娘とした若い女性の声があちこちに上り、又一方ゴ
リカラ昇る。素晴らしい雲海、空は今日も一矢の雲もほ
う

の方に向って行く。寂軒がれば頬を洗つていない目に青空がまはやい。会の連中の誰彼を思い浮かべながら走る。

コーヒーを飲む。

夏次峠へ急降。峠の真中にヒューフテ谷、ごんと遡つているがもう無人らしい。峠から真直樹林帶の山の通を登る。こちらは雪は少い。介らぬ間に銀の雲を通じ樹林等と抜けると氣持よい平地に出る。左折しながら登れば東友狗岳、西天狗は直ぐ隣りである。もう雪はない。こ處がハヤ岳の最北端で、蓼科山とその高原が美しい。東天狗へ戻り少し北進すると左へ黒百合平への道が分れる。鶴岩の累積のようなガラくした凧を辿る道でガスでしかるに一寸分りにくさう。

間もなく悲しい伝説のある黒百合平に着く。此處にも小屋があるがもう人気はなく戸も閉め切られており、永場も涸れ切つてあり、水稻は泥まじりの水となつていて、嘗ては此処には黒百合があつたらしいが、昨今では完全に絶滅してしまつたらしい。パンを噛つて一休みする。

湯ノ湯へ昼頃着くつもりで黒百合平を発つたのが、

時界百合平からの道の途中、右への導標に従えばよいらしい。

墨ヶバスは丁度通つにひこうで、次までには三時間余があると算定。ニキ旅館で休むことにする。昨夜は大部客があつたそうだがもつ今はひそりとしている。

荷物の湯、奥の湯が引いた鉢巻の水と電気で沸かしている。温泉ではないのが惜しいが、効能書には硫酸カリウム三重過剰に良いと長く浸かるが良いとある。相客も互しあわせくつぶることにする。湯殿の壁に俳句を墨書きした懐古の板看板が一面にぶら下つていて、宿の主も句題ありと見える。逃げ残念ながらこのようなスラくとした字体は私にはまことに苦手、湯に浸つたり出たりしながら一つく判読する。

とにかく、真冬にいつか入るための下見も兼ねての山行であるが、今年が例年に行く暖いためか雪が案外に少く、少々窮屈り長い山行であった。終し二日間ヒモ快晴に恵まれ、のんびりと眺望を楽しむばかり終始出来たことて満足しよう。

ヘコース・タイム

標に導かれて尾根伝いに、バス終点の湯ノ湯よりすつと下

の辰野館まで歩いてきた。宿で聞いたところによると湯ノ湯というのはバス道に沿つて互に離れて三軒あり、この辰野館はその一番下(三〇分位下)である。最初の湯ノ湯へ

(一月一日) 新宿駅(0.10) — 茅野駅(たにやせ・00) — 農場(八・〇) — 柳川(八・三五) — 黄瀧(九・二) — 行者小屋(二・二五) — コル(二・二五) — 阿弥陀岳(二・二五) — 赤岳頂上小屋(一四・三〇) お

(オニ日) 赤岳頂上(六四〇) — 横岳(七二五) — 飯賀岳(八〇〇)
九一〇) — 夏沢崎(九二五) — 東天狗岳(一〇二五) — 西天狗往復 +
黒百合平(一一五〇一四五) — 辰野館(一七五〇一九〇七五) — ラク町(一七一五〇一八〇一発) — 新宿取(二三〇五)

△註△

参考までに――

【服装】
一 ピツケル・アイゼン(西本)、但し全然使用せず
すんば)・ランタン・シユニアフ・コソフエル・
メタ2個。

【服装】
一 エマーネットシャツ・薄綿長袖シャツ・厚端ギ
ヤハシャツ・薄メリヤスズボン下・チヨフキ・
軍手・歩行中は以上て大体十分。

夜間早朝、休止時等は、メリヤスシャツ・毛
のセーター・スキーウジヤムハイ等を加え上。
皮のオーバーハンド袋は使わずにすんだ。

【気温】
一 赤岳頂上で最低 -11°C 、日中(日陰)で 5°C くらい。

風は3~5m位の弱いものであったが、午後か
ら夕方にかけては8~10m位のようだった。寒
さの感じは身に受ける風速による感じは勿論で
あるから前記服装は、この山のこの季節として
は可成温和な日の服装であると見てよいだろう。

○湯
一 辰野館休憩料(一部屋コタツ)茶代入浴料含めて百
円。



中央線より見に八ヶ岳

通りくれば雪つけし駕籠なりて
八ヶ岳の西を現れぬに行り

新雪は凍てつきておりアーケルの
缺も空しく鳴る聲ぢゆく

雪乗る内外院ケ岳の頂の

石う切仏奥くおわすも
身を折りてピツケルに倚りやすらえど
荒毛動悸の暫し止まざり

まばたくは信州の灯が甲斐の灯か
架てつく星と吾ともにあり

たくつりき男根より山の月
原てつきし御天の星雲の上

冬のハケ巻越えて湯ノ湯のどかなり

紅に落葉松林もえあかり
蓼科の山に日は落ちんとす

秋の合同ハイキング

—奥武藏—棒ノ嶺



☆とき： 12月1日 (うすく"モリ)

☆ひと： 山縣昌彦・大武昭雄・辻宏視・田中莞二・
村田俊満・斎藤良夫・筒井満栄・近藤澄江・
堀塚幸子・吉野富子・横山純子。

☆コース： (A) 川又→岩茸石→棒ノ嶺。 (B) 白谷沢→棒ノ嶺。 → 名栗也

夏の大きな山行も終り、秋はなか
らが皆の都合が揃わないので一度冬
のハイキング程度の山行をやって香
氣に山のゆく秋を味わおうというの
でこのハイキングが計画されたので
ある。

然し種々の都合で参加者小予想外
に少かったのは残念であった。

白谷沢から棒ノ嶺

吉野富子

一行十一名、午前七時十四分発の
川越線で大宮駅を出発。たまに早く
起きる所鷹が皆眠そうに顔をしてい
る。車内は空いている。一時間程で
東飯能駅に着く。こゝから西武線の
飯能駅迄歩き、八時四十五分発の名
栗行のバスで町を後にする。

このバスの切符の買い方が面白い

。一人七十円なのであるが、一枚十
円の切符が六十何枚かついた回数券

が五百円で買え、あと足りない分に
四十円の切符を何枚か買えばよい、

と草野さんかわざく教えてくれた
のだが、一寸言われただけでは何の
ことだか分らず、數学の大家たる顧
問でさえも最初は「六十何枚も買わ
されたって、こんな処へそう来やし
ないし」となんて慌て、いた。
地配していた天気も、雲が切れ
始め、軟い陽の光が麓の菴煙や紅
葉した林にふり注いでいる。かな
り激しい振動にも慣れ頃、川又
に着く。

ジヤンケンで二班に分かれ、此處が
り直ぐ名栗川を横切って尾根と行く
コースと、白谷沢から行くコースと
をとることにする。

尾根の班の人達は次の人に全部
水筒を渡し、「い、水を汲んで来いよ
。重くなつて悪いな。その代り菓子
は持つて行ってやるから出しな。」
勿論猫に飼節を持たせる人はありま
せんでした。

さて、私達の班は有間溪谷に入

り、小さな登電所を過ぎて暫く行つた処で、左へ白谷沢入口の導標に従つて沢に入る。とはいっても沢に沿つて林道が続いており沢自体も貧弱でプリントにあつたような、飛瀑の連続する流感克服訓練向き爽涼コースの面影は一向にない。可愛らしい滝を眺めながら林道は何回か沢を横切つて上へ続いている。私達より大部前に川又を登ったパートイがそもそもそぞしているのを追抜く。やがて流れも細まり、案内書にある白乳岩の滝うしいあたりで道は沢を離れ、一寸急登すればやがて山の中腹をからむよつに左へ曲り込む。葉を落した木立を通して岩苔石が見え、○さんとリーダーとする尾根の班が岩の上て手を振つて迎えている。丁さんの声が少しづつ聞こえる。

十一時岩苔石に着き、こゝて全員合流したわけである。
——編集者註、尾根の班の方は原稿が——

に簡単にその概要を挿入します。又今回の山行では皆さん多分に文學的才能を發揮されまして数多くの近句いや失礼名句をもひいてお等せいだやましに之で紀行文の處々にはさんて皆こんなに味わっていたときたいと思ひます。作者は記さないでありますから御推定下さい。

川又が直ぐ名栗川を渡り、斜面に作られた畠の間の道を登る。向もなぐ林の中の道となる。

○沢登る友と別れて落葉路

畠のパンを入れた紙袋一つ吊りぶら下げて手にチャツカリした丁君、丫さんのサックを受取り、Nさんの荷もその中に入れて背負つて、大いに優しい所を示す。

然し向もなく「やつぱり朝飯を喰わにやあ！」といぢらしい音を上げ賛成者多數で一休みとなる。

○下りくる母子の背なる柴細しやがて中腹を捲くようなはつきり

した道と、右手に登るかすかな径と分歧する所に出る。頼りない指導標は石を指しているのだが、どうも左の道の方がはつきりしているので〇君は皆を左手にリードする。処がどうもこの道は捲き放して上へ出さうもないとき付き、途中で右向りますから御推定下さい。

右、前へ進め、で斜面をかさごそとやつてやつと尾根へ出る。岩苔岩は直まである。(吉野さんの文に戻る)

○岩苔に登りて疲れしドーム見る

全員岩苔石の上に登り、記念撮映、向もなく他のパートイがやって来たので彼等に席を譲り、我々は格次入り際へ向う。

楠の木の葉が徑を埋めている。急坂となり、それに霜で土が軟く登りにくい。こゝまで来ると呼吸も苦しくなり、平生の運動不足が祟つてくる。丁さんの歌を口ずさんで登つて行くのに羨しくなる。それでも立木を頼りに最後の尾根を登りきつて権次入際の指導標に着く。

。冬の陽や白き導標に躍一つ

こ、から椿ノ峯までは見晴らしの
きく茅戸の一直線の登りである。ふ

うくと展望を楽しみながらドーム
状の山頂に近付く。菱形の名栗の谷
が箱庭細工のように視野に拡がる。

丁度十二時山頂着、頂は径二十米
程の平らな円形で、奥武蔵、奥多摩
、秩父の山々がパノラマの林に展開
している。富士も真白な頭を覗かせ
ている。

。富士高し茅戸の山の冬めぐる

。北風の吹けば武甲の肌光る

。川乗の谷に炭焼く煙あり

初冬にしては暖がすざる陽光が、

椿ノ峯を一面に白く覆っている茅戸

の上に静かに降り注いでいる。風も

なく、穏かな小春日和のようである

。小鳥達も谷向を往々に飛来したり、
のんびりした光景である。

。冬日やろく川苔山はしみじみと

。枯れ木に茅戸の尾根で昼夜せん

昼食の用意。持参のラジウム缶
が青い焰を上げ、Oさん自慢の緑茶
を御馳走になる。顧問は瀬戸の茶碗
まで御用意とは驚く。

が青い焰を上げ、Oさん自慢の緑茶
を御馳走になる。顧問は瀬戸の茶碗
まで御用意とは驚く。

お菓子が結構沢山ある。

。山の昼食巻に白玉冬の月

。枯草に抹茶さくみぬ梅ノ巻

H・T宗匠より句談あり。吾不足。に
けでも一つの句にとか。何とかて卵

を喰うと舌口を開けたとかいう句を
聞かされ、それこそ皆暫し同じ口

が小さがうながつた。

。落葉踏みてたごりし峯の影深し

。風寒く鳥籠ひがう椿ノ峯

。行く秋に句談などせし椿ノ峯

。寒柿や鳥瓜一つ汽車止る

。秋山やえせ宗匠の歌をよむ

。むくつりき男歌よむ秋の山

山行歌の合唱はまあ落葉、Mさんは
はカメラをパチリ。Oさんもや

おら博物館にてもありそなはカメラ
を取り出し、両もエイヒ掛声をかけ

て叩くと蓋が崩くというカメラ。

KさんYさんNさん下さんの女性
連はじじやかに日向ボブコ。

る。西ひ岩茸石迄戻り、右へ名栗鉱
泉へ通さ下る。

枯れ残った董もある。

。枯れす、さ武藏の山の影與し
。周ままでなお立ちゆれる葦かな

。冬枯にすみれ一輪椿ノ峯

。落葉踏みてたごりし峯の影深し

。風寒く鳥籠ひがう椿ノ峯

。行く秋に句談などせし椿ノ峯

Sさんは動植物に詳しく、このよ
うな溪流には何んとかやいるといろ
う教えて下さる。

く教えて下さる。

うな溪流には何んとかやいるといろ
う教えて下さる。

く教えて下さる。

周も戻く名栗ラジウム鉱泉大松園

に着く。早速、剃刀・タオル御持參の

顧問を先頭に男性軍は汗を流しに行

つたのは勿論である。

。放山のいとほみ終えしラジウム
の湯

。ひほの湯にくつろぎ旅の味思つ
て叩くと蓋が崩くというカメラ。

。椿ノ峯下れば湯宿紅葉なり

宿からバスの停留所までは五分
くらい。皆満足そうな顔である。

。霜に破れし龍脣胸にかざしけり
・棒ノ峯紅葉の谷廻バスの音

ヘコース・タイム✓

大宮駅(セ・一回) — 飯能(ハ・一〇) — 西武飯能(ハ・四五登) — 川又(元ニ五着九・四五登) — 岩茸石(一・〇〇) — 棒ノ峯(一・二・〇・〇・〇) — 名栗鉱泉(一・五・三・〇着)

(註)

五万円の一地図には川又から棒ノ峯へ直接登るルート一つしかのつっていないが、これは余り展望もきかず、暑い時は白谷沢のコース、涼しい時でもバスでも少し先へ行って仙岳尾根から登った方が良さそうである。

とにかく、棒ノ峯だけでは軽方まるから、更に川苔山へ抜りたりしたら丁度良くなるであろう。

名栗鉱泉の休憩料一人百円はちと高すぎていたけないよう思ふ。(特に十何人の団体に対して)



会 務 報 告

一、昭和三二年度会計中間報告 (32.11.30現在)

收入	(単位円)
貢…	13,350
附…	3,000
計	16,350
支出	
ラシウス(1)	2,500
ピッケル(1)	3,200
アイゼン(2)	500
ランバード(1)	500
市	800
タマラ(1)	2,000
31.32年度分	1,550
籍	4,500
書	450
会員発行費	450
県体派遺補助	350
ゴス印スタンプ	350
パット	350
計	16,350

十一月末で石の如く丁度残高〇となりました。これからは会費の納入に一戸の御協力をいたしまして懸案の会の予備金を積立て、ゆきたいと思ひます。

| 会計係 |

二、十一月の定期山詫会は、大武・菅野両君が幹事となって行われました。席上、毎月幹事は持ち廻り式にすることに決まりました。十二月は吉田・村田両君になります。

三、同席上「深穂」の編集を持ち廻りて受けもつことに決まり、6号は高橋・吉田両君にお願いすることにしました。

四、十二月の山詫会は、一日に棒ノ峯ハイキングを行ったため、スキーコンペの打ち合せを兼ねて十二月二十日(金)夜、いつもの会場で開くことにしました。特に合宿に参加する人は必ず御出席下さい。

五、スキーコンペは、さきに御案内した通り十二月十九日から一月三日まで志賀高原登場、一月二日より六日まで石打と二手に分けて行います。志賀高原の方は宿舎の予約等に筒井さんのお父さんに大変御世話をなりました。この紙面を借りて厚く御礼申上げます。

六、会員の新名簿は次号に掲載することにします。

以上

夏山も終り、秋には会としての大さな山行もなかつたので、会報は来春にでも、という意見もあつたのですが、十一月の山詫会の席上、一緒に山へ行く機会が少いからこそ、お互の動静を知つたりする意味で今年中にもう一つ出して欲しいという声が強く、かくしてこの6号が生れたわりです。

御覽にはれば御氣付きてせうが、5号までとは一寸違つた味になつたようですね。それは端的に言えば、一、会の記事がなくなつて椿ノ岑の記事が入つたことに、と言えるかも知れません。編集者の意図したところは、夏山と冬山との中間のこの一と休みの時期に、なるべく多くの方に楽しんで、或はのんびりと読んでいにやけるようなものを作ることでした。です

から山行記録としては全般に物足りないと言えるかも知れませんが、仲間の誰かが、いつ、何處を、どんな気持で書いていたのか、等を知るのも興味あることだと思いますし、その意味ではこの6号は、今迄のことは遠づいた意味で面白く読んでもいいものではないでせうか。

(但しこのことは、会の今後の方向が椿ノ岑的反ものになるというのではないことは勿論でし)

「仙丈一塙見」の山行記録は、5号の記録と比較すると興味があり、K・丁翁の「負口惜しみの記」は單なる弁明とはこらすに、山の怖しさといふものを考えながら、大いに我々も参考にするべきでしょ。棒ノ岑しては参加諸公の文學的才能が遺憾なく發揮されました。編集者が首を傾げるような句も大部あります。私はこれましたか。……

「仙丈一塙見」の山行報告として「吾妻一安達太良」「楓鳳三山」の卓独行の記事をのせました。

又「八ヶ岳」の卓独行の記録も、

毎度貴会の会報御送付有難うござります。今度ともよろしく御指導下さい。

「渓穂山岳会代表　辻勝四郎

各山岳会殿

昭和三十二年十二月二十日發行

発行所　渓穂山岳会

埼玉県浦和市高砂町五の八九

辻　勝四郎方

と伝えてくれるようです。

「仙丈一塙見」の山行記録は、5号



溪穀山会

埼玉県浦和市高砂町 5-897